

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U)

平3—119889

⑬ Int. Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成3年(1991)12月10日

G 10 B 3/00
G 10 H 1/32

D 6435—5H
Z 7829—5H

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全 頁)

⑮ 考案の名称 電子楽器の蓋

⑯ 実 願 平2—28665

⑰ 出 願 平2(1990)3月20日

⑱ 考 案 者 山 森 章 大阪府門真市大字門真1006番地 松下電器産業株式会社内
⑲ 出 願 人 松下電器産業株式会社 大阪府門真市大字門真1006番地
⑳ 代 理 人 弁理士 栗野 重孝 外1名

[] 明 細 書

1、考案の名称

電子楽器の蓋

2、実用新案登録請求の範囲

スライド蓋を有する電子楽器の蓋であって、前記スライド蓋を構成する蓋把手部と蓋本体に凸部と凹部を設けて、前記凹部と前記凸部に係合することにより前記スライド蓋に回転支点を設けたことを特徴とする電子楽器の蓋。

3、考案の詳細な説明

産業上の利用分野

本考案は、電子オルガン等のスライド蓋に用いられる電子楽器の蓋に関する。

従来技術

近年、電子楽器においても蓋を備えたものが多くなり、その蓋が重要視されている。

以下に従来の電子楽器の蓋について説明する。

第2図及び第3図に示すように、キャビネットを構成する一对の側板8の間に鍵盤や操作パネル等の設けられた操作部(図示せず)を設け、その



操作部の上面を移動自在に覆うスライド蓋 9, 10
 において、蓋本体 9 並びに把手部本体 10 及び蓋
 飾り 11 が蝶番 12 にビス 13 並びにビス 14 に
 よって回転自在に結合されている。把手部本体 10
 には、ビス 15 によって把手 16 が取付けられて
 いる。

考案が解決しようとする課題

しかしながら上記の従来の構成では、蓋本体 9
 及び把手部本体 10 の加工が複雑であり、また構
 成部品の数も多い為組立工数がかかり、コストア
 ップとなるという問題点を有していた。

本考案は上記従来の問題点を解決するもので、
 構成部品の形状を簡素化し構成部品の数を削減す
 ることにより、組立工数を減少させる電子楽器の
 蓋を提供することを目的とする。

課題を解決するための手段

この課題を解決するために本考案の電子楽器の
 蓋は、蓋把手部の一端に凸部（凹部）を設け、蓋
 本体に上記凸部（凹部）と係合する凹部（凸部）
 を設けることにより回転支点を形成する構成を有



している。

作用

この構成によって把手を一体成形した把手本体部を蓋本体に蝶番を用いずに結合することができる。

実施例

以下本考案の一実施例について図面を参照しながら説明する。

第1図に示すように蓋本体1に蓋飾り2をビス3によって取付ける。蓋飾り2の一端に設けた凹部4と把手5を一体成形した蓋把手部6の一端に設けた係合用凸部7を結合することにより蓋本体1と回動自在に連結される。

以上のように本実施例によれば、蝶番で行っていた回転動作を把手を一体成形した蓋把手部と蓋本体に取付けた蓋飾りによって行うことができるので部品点数が削減でき、またこれにより組立工数を大巾に減少させることができる。

なお、本実施例では蓋把手部に凸部を、蓋本体（蓋飾り）に凹部を設けているが、これとは逆に、



[] 蓋把手部に凹部を、蓋本体に凸部を設けてもいい
ことは明らかである。

考案の効果

以上の実施例の説明からも明らかなように本考
案は、把手を一体成形した蓋把手部の一端に凸部
を有し蓋本体に結合された蓋飾りの一端に上記凸
部と係合する凹部を設けた構成により蝶番を用い
ずに回転支点を形成することができる優れた電子
楽器の蓋を実現できるものである。

4、図面の簡単な説明

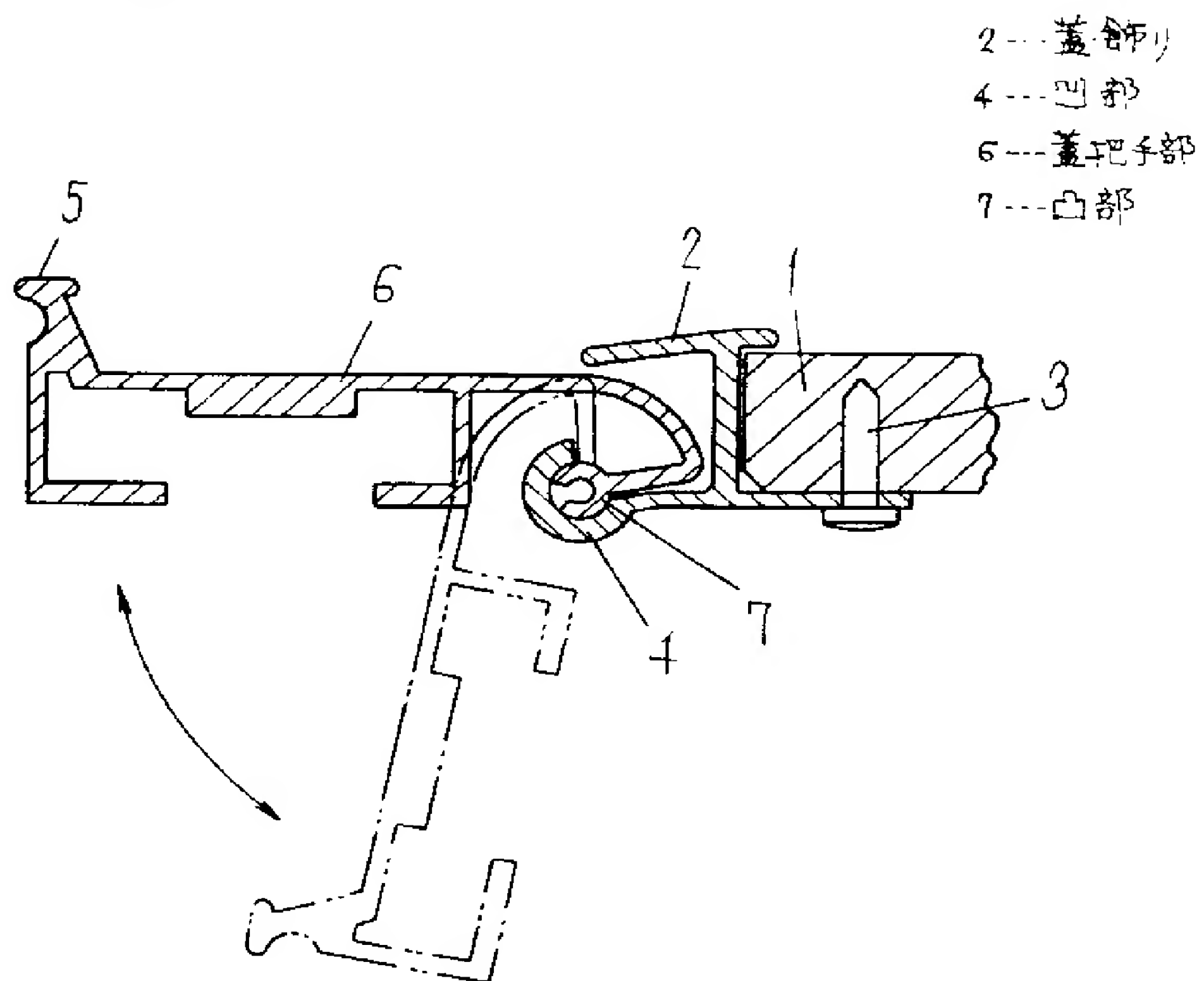
第1図は本考案の一実施例における電子楽器の
蓋の動作状態を示した断面図、第2図はスライド
蓋を備えた電子楽器の斜視図、第3図は従来の電
子楽器の蓋の動作状態を示した断面図である。

1 ……蓋本体、2 ……蓋飾り、4 ……凹部、5
……把手、6 ……蓋把手部、7 ……凸部。

代理人の氏名 弁理士 粟 野 重 孝 ほか1名



第 1 図



1426

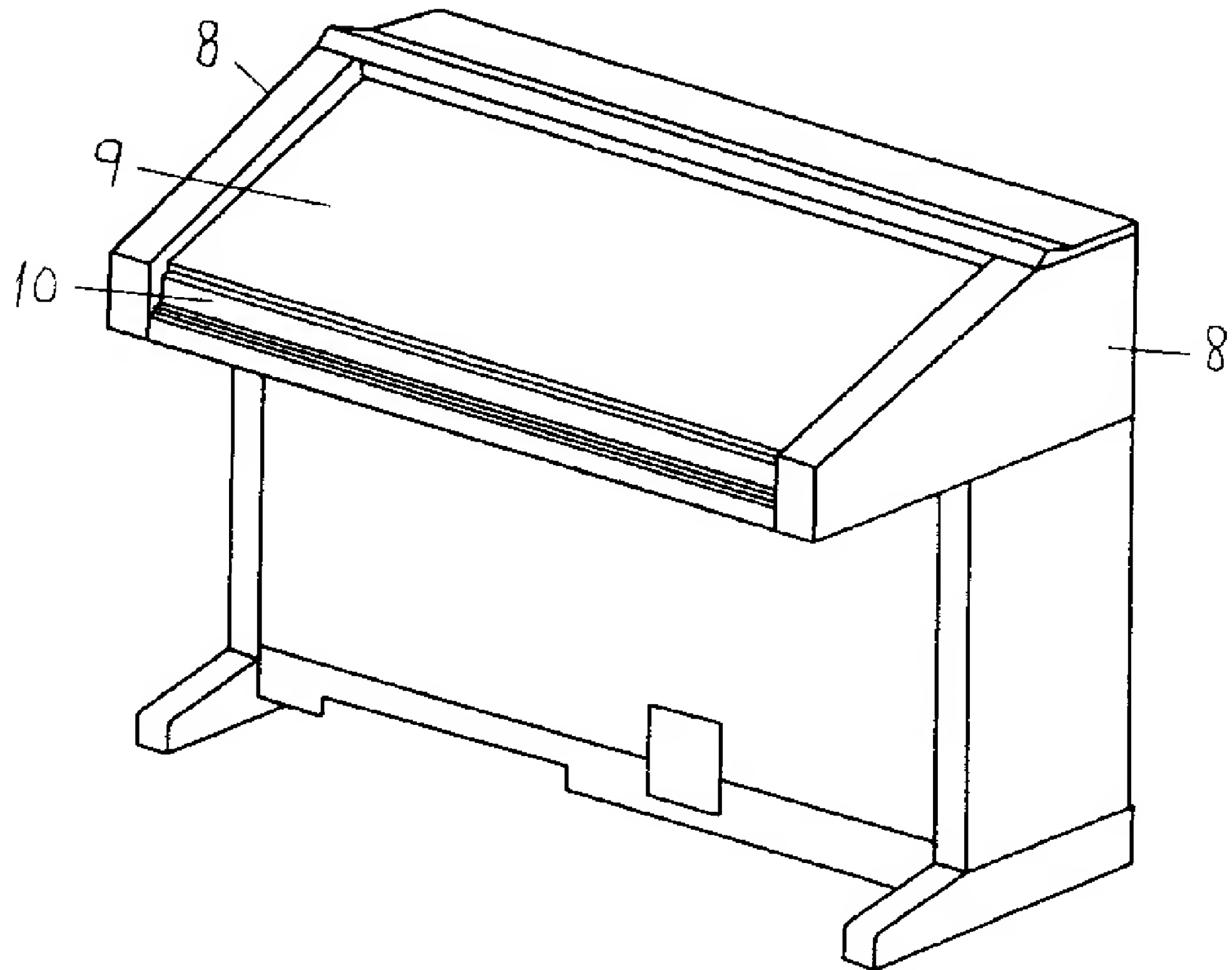
実開3 119889

代理人の氏名

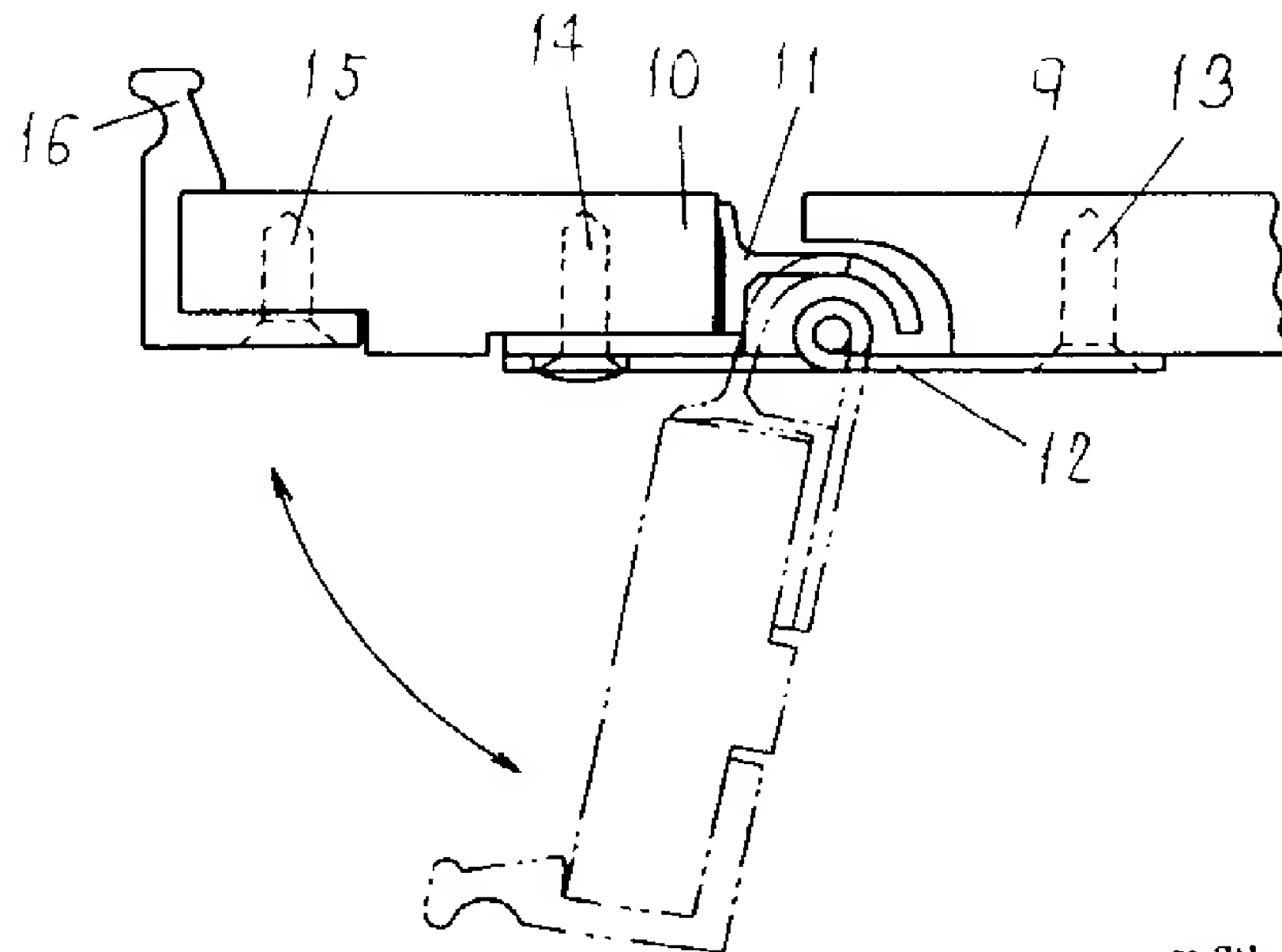
弁理士 栗野重孝

ほか 1名

第 2 図



第 3 図



1427

実用 3-119889

代理人の氏名

弁理士 栗野重孝

ほか 1 名